

モノづくり大好き高校生が輝く場を作りたい！

—ゼロハンカー大会への取組—

本校について

おかやま山陽高等学校は岡山県南西部にある浅口市に所在し、今年で創立97年目を迎える男女共学の私立全日制高等学校である。機械科、自動車科、調理科、製菓科の4つの専門学科と普通科5コースを設置する。生徒の「持ち味を生かす」ことを教育命題とし、本校でしか得られない唯一無二の学習機会の提供に尽力している。

高校生ゼロハンカー大会の誕生

「ゼロハン」は「05」、50cc未満の原動機付自転車用のエンジンを使った手作りの車両である。かつて、「全日本手作りゼロハンカーレース」という大会が広島県世羅郡甲山町（現世羅市）で開催されており、本校自動車科ほか数校が学生部門に参加していた。

「高校生主体の大会を開催したい」との想いから、H14年12月22日、岡山県工業高等学校教育協会の主催で「'02岡山県高等学校ゼロハンカー大会」を開催した。会場は本校の硬式野球部の専用練習場横の空き地で、参加校4校、出走車両8台のささやかな大会だった。当時は

おかやま山陽高等学校長 原田 一成

まだゼロハンに対する理解度も低く、興味を持つ教員と生徒のいる学校だけによる、手弁当での開催だった。

翌H15年からは主催団体を全国自動車教育研究会西日本支部とし、本校が主管校となり、「第1回全日本高等学校ゼロハンカー大会」を開催した。会場は、吉備高原山中のモトクロスコース。参加校は11校、20台に増えた。大会前日に降った大雪の溶けたダートでリタイヤが続出、泥まみれの思い出深い大会となった。

流浪の大会

翌年度からは「雪が降らないところ」との条件で会場を探した。レースの過程で轍ができるため、球技用のグラウンドは貸してもらえない。エンジン音が出るため、街中では受け入れてもらえない。唯一使用許可が出たのが、隣の広島



県福山市南部にある「みろくの里グラウンド」だった。第3回、第4回大会はここで開催し、この時から決勝を「24分耐久レース」とする方式を採用した。

みろくの里は良い会場だったが、他県からの参加校が増え、交通の便が問題となった。高速道路のICから車で約1時間弱と遠い。さらに本校からは車で約2時間近くかかり、会場設営に苦勞した。

そこで、県内で、高速道路のICからも本校からも近い会場を、と再び会場探しに奔走した。最終候補となったのが、岡山県倉敷市を流れる一級河川「高梁川」の河川敷にある公園のグラウンド。公園を所有する市にかけあうと、地元である倉敷市西阿知西原地区住民の同意がなければ許可は出せないとのこと。地区長さんの導きで、炎天下、手分けして地区の家を一軒一軒、チラシを持って説明に回った。地区の皆さんは大変協力的で、約100軒の全てが利用を承諾してくださり、嬉しく胸をなでおろした。

高梁川河川敷では第5回から第15回までの計11大会を開催させていただいた。

多くの記録と記憶がここで作られた。回数を重ねるとともに、大会のレベルも向上した。決勝戦にしても、初期のころは、出走した10台中ほとんどが故障や破損でリタイヤし、遅くとも最後まで動いている車両が優勝することもあった。それが年ごとにリタイヤする車両が減り、ほとんどの車両が生還するようになった。優勝争いも1周どころか半周を争うようになった(耐久レースなので周回数で優勝が決まる)。この公園と、ここを管理する地元住民の皆様には本当に感謝している。

ところが一昨年、H30年夏の西日本豪雨が起きた。河川敷のグラウンドは厚い土砂に埋もれて復旧不能となり、河川敷を管理する国から使用禁止が言い渡された。

開会式当日まですでに半年を切っている。突

貫で代替会場を探す、どこも断られる。最後の望みをかけ、地元浅口市内の海沿いの干拓地の公園に再チャレンジ。十数年前に一度依頼して断られた場所だ。管理する市に問い合わせると、「地元住人の同意があれば」との返答。地区会の同意はすぐに得られた。このころには平均参加校数は約25校、エントリー台数も40台を超えていた。観客も年々増え、延べ数百人が観戦に訪れていた。地域活性化の効果が期待されたのだろうか。

ここなら本校から車で15分、高速道の鴨方ICからも20分少々だ。近隣には救急対応できる病院が複数あり、万一の事故の時にも対応できる。なにより地面の平坦性が高く、安定したレースが期待できる。ゼロハンカー大会は、約15年を経て本校の地元に着陸した。

2人の貢献者

ゼロハンカー大会を語るうえで外せない人物が二人いる。一人は発足当時、おかやま山陽高等学校自動車科長であった山本茂氏である。氏は本大会の生みの親である。

本校には強豪として知られる空手道部があり、その空手道部が主幹している大会に「桃太郎杯全国高等学校空手道錬成大会」、通称「桃太郎大会」がある。山本氏は以前は空手道部の顧問の一人だった。この大会は約35年前、全国の強豪を本校に招いて胸を借りる小さな寒げいこの会として始まったが、その後本校が強豪に育ったことで評判を呼び、現在では全国から約1500名が集まる高校空手道三大大会の一つとなっている。岡山県高体連空手道部主催だが、実際には今も本校の空手道部と保護者が中心となって運営している。高校生なら誰でも参加できるオープンエントリーで、「空手大好き人間」を育てる格好の場となっている。

山本氏の胸の内には、「車好きな高校生が輝

ける場を」,「第二の桃太郎大会を」との思いがあった。山本氏のこの想いが多い協力者の共感を得て、本大会は誕生した。

もう一人が現在の自動車科長で、現在本大会の実行委員長を務める森秀樹教諭である。本大会は、最初のころは各校の担当者が希望しても、学校当局から「危険だ」との理由で参加を許されないというケースが、主に公立の高校で多かった。そんな本大会を、森教諭はレギュレーションの整備・改善を通じて近代化・標準化し、安全性を高めていった。そして県内の参加校を中心に大会準備委員会を設立、現在では岡山県高等学校工業教育協会が共催者となっている。

発会当初、会場設営や撤収のほぼすべてを本校関係者が担っており、本校の教員は自分のチームの指導に当たる暇もなかった。今では大会前後で参加校それぞれが余力に応じて運営に協力いただけるような体制ができている。これも森教諭の功績である。

他にも自動車整備・販売関係者、教育関係者、在校生、卒業生、多くの方々が公的・私的に本大会の誕生と成長にかかわってくださった。大会は人であり、その人の想いであるということを感じている。

記録には残らない、記憶に残るエピソード

本大会には思い出深いエピソードが多くある。ある強豪校の選手は、決勝戦で周回数・ス



ピードともに圧倒的な強さを見せ、優勝は確実だった。彼はチェッカーフラッグを受けながら、あまりの嬉しさにガッツポーズでゴールイン、そのまま停止線を越え、失格となった。ゴール後、必ず停止線で一旦停止するというのが本大会のルールだ。

また、決勝で上位入賞したあるチームは、後車検（決勝後、上位4チームの燃焼室の体積を精密に計測する）の時点でポアアップが発覚した。中古で入手したエンジンは前の所有者によって改造されていた。指導教員も選手たちもそれを知らなかった。しかしルールはルール、彼らも失格になった。いずれも関係者の悔しそうな顔が今も目に浮かぶ。

逆に、ある年の大会では、上位でゴールしたチームが大会本部を訪れ、自ら部品落下を申告、失格となった。安全を第一とする本大会では、どんな小さな部品でも、レース中に落下すれば即失格だ。部品には名前は書いていない。しかし、このチームは自ら申告してきた。彼らには「フェアプレー賞」が贈られた。

本大会の特徴は、製作、整備、操縦の三要素が揃わなければ結果が望めないという点である。ただ速ければいいというものではない。そこには生徒同士、教員生徒間の信頼に基づく協力関係が必ず必要とされる。そして、そのような信頼関係、協力関係はフェアプレーの精神抜きには育たない。

ついにテレビ番組化！

毎年の大会を見ながら「これは絶対に一般の人にもウケる」と思っていた。TV番組にして、車づくりに燃える高校生の様子を多くの人に見てほしかった。そして、車好きの若者を増やしたかった。地元のTV局に尋ね、番組化に必要な予算も把握していた。しかし、スポンサーを集めるノウハウも人脈も持っていなかった。

それを解決してくださったのが、岡山トヨタ自動車株式会社の代表取締役社長、梶谷俊介氏である。

大会では、来賓として（一社）岡山県自動車整備振興会、岡山県自動車整備商工組合、（一社）日本自動車販売協会連合会岡山県支部の代表を毎年招いていた。梶谷氏は現在の三団体共通の代表である。梶谷氏は就任以来、毎年、大会の様子を最後まで熱心に観戦しておられた。梶谷氏から若者の自動車離れが、車の販売台数だけでなく、ついに整備人材の不足にまで影響するようになったとの話があった。これは我々教育関係者も以前から痛感していたことだ。やはり車好きの子供、若者を増やさなければならない。

そこで梶谷氏に、番組化の話は何度かしてみた。その場で明確な反応があったわけではない。一昨年、会場が浅口市に移るタイミングで、地元のRSK山陽放送からゼロハンカー大会のTV番組化の打診が来た。スポンサーは上記の自動車三団体を中心だ。出資をまとめるために奔走してくださったのはもちろん梶谷氏だった。

撮影には世界遺産の番組を担当したこともあるドローンチームが投入され、ゼロハンカーの臨場感あふれるバトルは30分間の番組にまとめられた。地元に加え、九州や四国、東海地方など、参加校各地区の局が放映権を購入し、各地で放映された。放映された番組の評価は上々だった。好評を請け、昨年度は放映時間が45分に拡大、本年度の番組化もすでに決まっている。こうして大会はさらに次のステージへと、成長の段階を進めることができた。梶谷氏には感謝しかない。

「夢」、ぜひ東日本大会を、そして、本当の全国大会を！

本大会を運営する上で、関係者と申し合わせていることがある。それは、常にフェアな大会



であろうということだ。前述の空手道でも、以前は似たような大会が複数あったが、主にホームタウンディジションの疑惑をきっかけに参加者が減り、消滅していった。本大会には本校の先代の学園長である故・原田三代治が寄贈した高さ175cmの優勝トロフィーがある。このトロフィーを去年は九州、今年は東海と、各校のチームが意気揚々と持ち帰る、それが夢である（本音を言えば、何年かに一度は本校に優勝してほしい）。さらに、最近ではスポンサーを打診する企業も増えたが、なっただけ条件は「金は出すが口は出さない」である。純粋スポーツを追求したい。

最後に、本稿を読んでおられる東日本の工業高校関係者諸氏にお願いしたい。本大会の現在の参加校は中国地方を中心に、四国、九州、近畿、東海までである。車両を運ぶ制約から、参加可能な範囲は限られる。そこで、ぜひこの魅力的な大会を、関東以東で東日本大会として開催して下さらないか。開催ノウハウはすべて開示させていただく。そのうえで本大会は西日本大会とし、上位入賞チームは東日本大会の上位入賞チームと日本のどこかで全国統一決勝戦を戦い、真の日本一を決める。そんな大会を実現しようではありませんか。そして、車好きの若者をたくさん育てようではありませんか。